

道 どうひょう 標

d o h y o

年間特集 「いのり」

第三回・福島への祈りは可能か 赤坂 憲雄さん

連載

あなたのいのちの物語 いのちを躍動させる自由な学び

習わしを科学する 包む

道しるべ 地獄

2019 夏季号



年間特集

「いのり」第三回

赤坂憲雄さん

福島への祈りは可能か

ささやかな罪、巨大な罰

チェルノブイリにはどんな祈りがあつたのか。そこで、祈りとはなにものでありえたのか。福島の祈りははたして可能なのか。スベトラーナ・アレクシエービッチの『チェルノブイリの祈り』を読みながら、幾度となく、そんな問いに囚われていることに気づいて、茫然としたことがある。

たとえば、「子どもたちの合唱」

と題された章には、こんな祈りの情景が拾われていた。作家は子どもたちから聞き書きをしたらしい。子どもらの眼に映った、チェルノブイリ原発事故の情景、そのひとつである。

まつ黒い雲。ひどい雨でした。水たまりが黄色になった。緑のもあつた。絵の具をこぼしたようでした。おばあちゃんがひざまづいてお祈りを唱えていた。「お祈りをするんだよ！この世

の終わりだからね。私たちの罪に対して、神さまが罰をくだされたんだよ」。兄は八歳で、私は六歳でした。私たちは、自分たちの罪を思い出してみた。兄は、キイチゴのジャムのびんを割ったこと。私は、母にないしょにしたことがあつたの。新しい洋服を扉にひっかけて破っちゃつたこと。タンズにかくしていたんです。

福島でも、事故のあとに雨が降り、ピンクや紫や黄色の水たまりができ、とたしかに聞いたはずだが、あれは幻聴のたぐいであつたのか。ともあれ、この世の終わりの祈りは、

なんとも哀しい。わたしたちの罪にたいしてくだされた罰だといわれて、六歳の女の子は、兄や自分が犯した罪をいっしょうけんめいに思い浮かべる。ジャムの瓶を割ってしまった、新しい洋服を破ってしまった……、そんなささやかにすぎる罪がいつたい、世界の終わりという巨大な罰に値するものなのか、と問い

かけるには、女の子は幼すぎる。罪はみな、大人たちが犯したものだ。人間たちには制御しがたい神の火を創ってしまった、それゆえに神の領分を犯した罪であつたか。子どもたちには引き受けようがない罪だ。

土地への祈り

祈りの主役がおばあちゃんであつたのは、むしろ偶然ではない。次の聞き書きにも、おばあちゃんが登場する。でっぷり太つたおばあちゃんが、身を揺らして、家や庭にお別れをしているのを、幼い子どもがじつと見つめている。そして、記憶に刻みつけている。

私たちの家にお別れをするとき、おばあちゃんは、お父さんに物置からキビの袋を運びだしてもらつて、庭一面にまいた。「神さまの鳥たちに」って。ふるいに卵を集め、中庭にあげた。「うちのネコとイヌに」。サーロム切つてやった。おばあちゃんのぜんぶの袋からタネをふるいお

この世の終わりの祈りは、なんとも哀しい

とした。ニンジン、カボチャ、キウウリ、タマネギ、いろんな花のタネ。おばあちゃんは菜園にまいた。「大地で育つておくれ」。そのあと家に向かっておじぎをした。納屋にもおじぎをした。一本一本のリンゴの木の間をぐるりとまわって、木におじぎをした。

まるで、ロシアの民話のひとつ齧くまみたいで、美しく、敬虔な祈りの光景ではなかったか。おばあちゃんは二度とここにはもどって来れないことを、たしかに予感している。だから、物置から、キビの袋や、卵や、野菜や花の種をとりだし、生きとし生けるものたちに、家に、納屋に、リンゴの木にお別れのおじぎをしながら播まいてゆく。それを、子どもが凝視している。

わたしはここで、宮沢賢治の「狼森おいのもりと笊森ざるもり、盗森ぬすもり」を思い出さずにはいられない。みちのくの開拓百姓たちが山を越えて、森に囲まれ、きれいな水が流れている野原にやって来る。そして、男たちがでんで森に呼びかける、ここに畑起しても

祈りの無力さを、子どもだけが知っている

いいかあ、ここに家建ててもいいかあ、ここで火たいてもいいかあ、すこし木もらってもいいかあ……、すると、森はそのたびに、ようし、とこたえるのだ。民俗学的に翻訳してやれば、木もらい・地もらいの儀礼といったところか。この百姓たちはきつと、岩手山の噴火があつて、開拓のムラを棄てなければいけない状況に追いつめられたならば、チエルノブイリのおばあちゃんと同じように、作物の種やエサを播いて、家や畑や野原、そして森にたいして感謝と別れを告げるにちがいない。

福島の祈りは可能か

こんな祈りの光景もあった。

昨日、母は病室にアイコンをかけた。あのかたすみでなにかつぶやきながら、ひざまずいている。みんななにもいわない。教授も、医者も、看護婦も。ほくが気づいていないと思つていて。もうすぐ死ぬということを感じていないと思つていて。みんなは知らない。ほくが、毎晩、飛ぶ練習をしているのを。(略) 七年生のときに、ほくは死がなんであるかを知りました。ガルシア＝ロルカの『さけびの暗い根源』を読んでわかつたんです。飛ぶ練習をはじめました。このゲームは好きじゃないけれど、しかたないでしょ？

夜ごと、飛ぶ練習をしている少年はいったい、どこに向けて飛ぼうとしていたのか。すくなくとも、その

少年は死がなんであるかを知っている。それがゲームであると諦めている。知らない、気づいていないのは、大人ばかりだ。わたしが被災地で撮った、たった一枚のひとを被写体とした写真、そのなかには、お地藏さんのかたわらに立ち尽くし、真つすぐにわたしを見つめている、三歳か、四歳くらいの女の子が写っている。あとで、その子の眼がなんとも言いがたい哀しみを湛たえていることに気づいた。そうして祈りの無力さを、子どもだけが知つていて、大人たちが知らないという残酷の前に、ずつと言葉を失つてきた気がする。福島の祈りは可能か、と呟いてみる。この地に堆積たいせきする、透明な残酷に向けて、それでも、いかなる祈りが可能なのか、問いは中空に行き場もなく浮かんでいる。

赤坂憲雄(あかさかのりお)

東京都出身。学習院大学教授。福島県立博物館館長。専門は東北文化論と日本思想史。主な著書に、『異人論序説』『排除の現象学』(ちくま学芸文庫)、『境界の発生』(東北学)、『忘れられた東北』(講談社学術文庫)、『岡本太郎の見た日本』(性食考) (岩波書店)、『武蔵野をよむ』(岩波新書)、『象徴天皇という物語』(岩波現代文庫)、『震災考』(藤原書店) ほか多数。



Your Spiritual Stories
あなたの物語
いのちの物語

7話目

「いのちを躍動させる

自由な学び」

ジーン・ウェブスター

『あしながおじさん』

あしながおじさん (Daddy-Long-

Legs) がジョン・グリアー孤児院で見つけた才能豊かな女の子に財政援助し、大学に入学させ自由な学びの生活を送らせるという物語で、一九二二年に刊行された。その女の子はジェルーシャ・アボット (ジュディ)、一七歳で九七人のみなしごたちの最年長者だ。

厳しくうるさいリベツト院長に辟易^{へきえき}していたが、その院長から呼び出しがあり、院の評議員の紳士がジュディを大学に送りたいと言っているという。これまで男の子だけだったが、今度は女の子が指名された。成績はよかったがお行儀 (礼儀作法) はイマイチだったジュディだが、「憂鬱な水曜日」という作文が評価されたらしい。孤児院の規律維持の場をからかうような内容だが、ユーモアのセンスがきらりと光って

いる。「無礼な作文」が評価されて選ばれた、とお固いリベツト先生は言う。

その紳士の顔は知らないが、足が長いことだけはわかったので、勝手に「あしながおじさま」とよぶことにした。奨学金を出すあしなが紳士の求めることはただ一つ。毎月、紳士宛に手紙を書くことだ。しかし、返事はない。

物語は、それから四年間、会ったことも返事を受け取ることもない「あしながおじさま」宛にジュディが書いた手紙によって綴られていく。たとえば、ジュディはラテン語、幾何学、生理学などの学びについて報告する。「教養ある人間への道を歩いているジェルーシャ・アボットより」と末尾にあり、「追伸」には「おじさまはお酒を召し上がりませんように。お酒は肝臓におそろしい害を与えます」と。

大学に入りたてで今学んでいる生理学について書いた後の皮肉めいた一言だ。こうしたユーモアは自由な精神の躍動がなくては生まれない。

また、孤児院でわざと院長に叱られるようなことをしたとも報告する。

ヒキガエルを捕ってきて窓の穴に突っ込んでおくといいたいはずだ。

そのための「お仕置き」はしかたなかったと書く。今、大学の寮でヒキガエルが出てくるとそのことを思い出して「欲張りの本能が目覚めるのです」。「ヒキガエルを集めずにいるただひとつの理由は、それを禁じる規則がないからです」。「あしながおじさん」のねらいどおりにジュディは作家になることを目指して、ますます文章を書く力をつけていく。

やがて、寮で同じ部屋の友達のジュリアの親戚の一四歳年上の長身の男性と知り合い、休暇にはその一族のいなかの旧宅とともに過ごす。いつしかジュディはその男性、ジャービスを愛するようになっていた。そして、そのことに悩んでいると「あしながおじさん」に告白する。すると、初めて紳士から呼び出しがかかる。実際に面会した後の手紙が最後の手紙となった。ジャービスが実は「あしながおじさん」だった。最後の手紙の追伸は「生まれて初めてラブレターを書きました。書き方を知っているなんて、不思議ですね。」



1919年に公開された映画ではメアリー・ピックフォードがジュディを演じた。

孤児こそが自由を体現する。高貴なものへの憧れが差別されてきた貧しい者の現実となる。『シンデレラ』や『王子と乞食』(作者のマーク・トウェインはジーン・ウェブスターの大叔父)とも通じるファンタジーだ。だが、過酷な現実を超えようとする自由な学びの力への信頼がある。そこに社会改革の希望も潜む。学んで自由になることは、今もいのちの支えの重要な源泉の一つだろう。

島蘭進 (しまの すずむ)

1948年生れ。東京大学教授を経て、現在、上智大学大学院実践宗教学研究科教授、著書に、『原発と放射線被ばくの科学と倫理』(2019年3月、専修大学出版局)、『ともに悲嘆を生きる』(2019年4月、朝日新聞出版)、『いのちをつつくてもいいですか』(2016年、NHK出版)、『宗教を物語でほどく』(2016年、NHK出版)がある。

習わしを科学する

包む

昔、アメリカで「日本のパッケージ」という写真集が出版されました。伝統的な包装の美しさが、例えば卵をいくつも藁苞わらぶとで結びあわせたものなど、機能的でかつすこぶるモダンであることに、われわれ日本人がビックリするような写真集でした。どうやら日本人は包装の天才のようです。

日本人は何でも包みたがりです。旅館の仲居さんに心付けを渡す時もポチ袋に入れたり懐紙かいしに包んだりします。外国ではチップを渡すのに包んで渡しません。もらってすぐ金額が分かるからこそチップだと外国人の人は思うでしょう。しかし日本ではお金をむき出しにするのは慎みがないと感じます。実は慎むという言葉も包むと関係があるのです。

包むのは中の物がはみ出さないようにすることで、堤防つつまの堤も、水があふれ出ないように包んでいるのです。感情をあらわにせずに包みこむと、慎ましい、という表現になります。本心は包んで隠しておいた方が

よい、というわけで、昔のご奉行様

は犯人に「包み隠さず白状しろ」と迫ったのです。包むという心情を形にしたのが風呂敷です。古代には風呂敷という言葉はなく、単につつみとっていました。日本最古のつつみは正倉院の御物ぎよぶつにあります。一枚の四角の裂きれを使ってものを包む習慣は江戸時代になって風呂屋と結びつきました。町風呂という今の銭湯のようなものが生まれ、風呂に入る時、着てきた衣類を包んだことからとも、あるいは当時の風呂は蒸し風呂ですので、中に入った時、下に敷いたからともいいますが、風呂敷という言葉が登場します。以来、日本は素晴らしい風呂敷文化を発展させ



ました。今は買物すると紙袋に入れてくれますが、あれがかつてはすべて風呂敷。一九七〇年ごろは、ナイロンの風呂敷が一億五千万枚も生産されたといえます。

そもそも風呂敷の文化と袋の文化は系統を異にします。洋服のような立体裁断の世界では袋が、和服のような直線裁断の世界は風呂敷と考えることもできます。ですから風呂敷は日本だけでなく世界中にあります。お隣の韓国にはポジャギという美しい風呂敷がありますし、中国の少数民族の中には藍染の風呂敷があります。面白いのは両者とも包んだあとほどけないように紐がついていることです。日本のように角と角を直接結ばなくてすむようになっていきます。実は正倉院に残る最古の風呂敷にも紐がついていて大陸の影響がうかがえます。

世界中の風呂敷の文化の中で日本の特徴は何かというと、風呂敷の美学美意識が発達して作法まで生じたことでしょう。江戸時代以来、友禪

やら型染なまぞめ、筒描つつがき、絞りなどさまざまの工芸的な風呂敷が生まれました。

庶民の生活では大風呂敷、泥棒といえは唐草模様と、いろいろな風呂敷が活躍しました。また内包み、外包みなどゆかしい風呂敷の使い方や、袱紗との組合せが楽しまれました。

しかし紙袋の盛行に象徴されるように、風呂敷文化は衰退。包むことに象徴される日本人の心情も衰退して、詰め込む文化に変化してゆくように思えるのが残念です。

熊倉 功夫（くまくら いさお）

1943年東京生まれ。東京教育大学卒業、文学博士。筑波大学教授、国立民族学博物館教授、林原美術館館長、静岡文化芸術大学学長を歴任し、現在MIHO MUSEUM(ミホミュージアム)館長、国立民族学博物館名誉教授。2013年、中日文化賞受賞。著書に『日本料理の歴史』『茶の湯といけばなの歴史 日本生活文化』『後水尾天皇』『文化としてのマナー』『現代語訳 南方録』『茶の湯日和 うんちくにご遊ぶ』『日本人のこころの言葉 千利休』、熊倉功夫著作集(全7巻)等多数。専門分野は日本文化史、茶道史。

地獄

地獄図を見ると、獄卒が罪人を責める様子が厨房が描かれていることが多い。平安、鎌倉時代の厨房のありさまである。なかに「包丁式」までが描かれている。ただ調理されているのは人間で、調理しているのは牛頭、馬頭と呼ばれる獄卒である。いわゆる人間と動物の逆転現象である。釜ゆで、串刺し、網焼き……。調理方法は現在と変わっていない。

今日、奈良国立博物館に所蔵されている国宝『地獄草紙』には、「鐵磔所」と呼ばれる地獄が描かれている。巨大な鉄の挽き臼を三人の獄卒が怒りとも、楽しみともつかぬ表情で回している。挽かれてるのは当然のこと人間である。周囲には血にまみれた「ミンチ肉」があふれている。その「ミンチ」を本当にうれしそうに「箕」(ちりとり状の籠)にあつめているのは女の獄卒である。彼女はその「ミンチ」で何をつくるの

だろうか。これにパン粉と生卵を加えて、塩・胡椒を少々でハンバーグの素材ができる。思わず笑みがこぼれるのだろうか。

改めて思うと、私はまさしく獄卒と同じことを繰り返して、自らの「いのち」を養われてきた。来世に逆転現象が起こったとしても当然であろう。

いかなる「いのち」も人の食料として生まれたものはない。なのに一言の怨みも言わずに、黙って私の血肉になってくださっている。その「いのち」をいただく以外に私が生きる道はない。そこに大悲の極限を感じる。まさに「ホトケさま」である。

「何で他人に食われねばならぬのだ」と喚くとき地獄の苦と闇が生まれる。「今度は私が生まれ変わり死に変わりして、人びとを生かさせていただきます」と覚悟したとき、怨みの闇は消えて光の浄土が開かれる。

編集後記

赤坂先生の記事にある「子どもだけが祈りの無力さを知っていて、大人たちが知らないという残酷」という一節が心に残る。たしかに『チェルノブイリの祈り』から引かれた3つの印象的なエピソードではいずれも、大人が祈り、子どもはそれを見つめていた。

辜なき子どもたちの眼には、いったい何が映るのだろうか。未来に希望をつなぐ言葉はあるのだろうか。

私たちの暮らしては、世界からさまざまなものを恵まれて成り立っている。特集記事にある「木もらい」の儀礼は、人間が我がもの顔で占領し、踏みしめている土地が、世界から恵まれたものであったことを思い出させてくれる。また天岸先生が触れてくださったように、食べることも「いのち」を恵み与えられていることだ。

数限りのない恵みが、当たり前前と想っている生活を支えてくださっている。未来に希望をつなぐ道があるとするなら、それは当たり前前を不思議と感ぜられる心を育てることにあるのかもしれない。(釈圓真)

表紙の絵

花持て行く

インドでは蓮と睡蓮の区別はない。サンスクリットではどちらもパドマ (padma) といい、現在のヒンディ語ではカマル (kamal) といわれる。睡蓮にはシヨッキングピンクの大輪の花もあるが、ほんの教センチの愛らしいものまでさまざまな種類がある。汚れた泥水の中からも咲くために、蓮や睡蓮は釈尊の誕生の象徴とされてきた。西暦前1世紀初め頃につくられたサンチー第二塔の、欄楯の莊嚴となっている。女性は一輪を供えに行く。

畠中光享 (はたなか こうきょう)

日本画家 / インド美術研究者
/ 真宗大谷派僧侶

仏壇仏具のことは
お気軽にお問い合わせ下さい

株式会社 廣瀬佛壇店

☎0120-81-7065 ☎06-6771-7007
ホームページ <http://nttbj.itp.ne.jp/0667717007/> (詳細地図有り)
〒543-0062 大阪市天王寺区逢坂2丁目1-12
(四天王寺西門交差点 西へ30m)